小田原史談

第103号
発行所　小田原史談会
小田原市南町2-3-21

新年あいさつ

会長　中野敬次郎

啄木の言い草をかりるようですまないが、今年は何かいいことあるようだ。元日の朝晴れて風なく、よい正月でした。皆様まことにお目出たいことに存じます。

しかし昨年は西洋式の西暦一九八〇年を取りあげて「八十年代」々々という言葉が流行して、二十世紀末の危機感のようなことがしきりに言われたが、今年はまた中国式の「辛酉の年」を称えて何か大きな不吉の変革でもくるようなことを言う人が多いのです。

元来、辛酉の年を問題にするのは中国の緯書という書物から書き始めた五行説の思想によるものであって十干（かん）十二支（し）というもので年を組み合せて行くと、辛（かのと）と酉（とり）との重なる年が六十年に一回めぐってくるが、これを辛酉革命といって、辛酉の年には大変改革や革命があるというのです。

日本では奈良時代以前からこの思想がはいっていて平安時代の初期の醍醐天皇の天皇のときに、暦学者の三善清行が和漢の古書から辛酉の年の変革の事変例をひいて列挙して天皇に改元を上奏したので、これが採用されて昌泰の年号を延喜に改元したことがありまして、これ以後辛酉の年に改元することが度々とありました。日本人は科学的・自主的に物を考え、且つ言うことができないのでしょうか。

アメリカの働きかけ、ソ連の体度、中国の変動、韓国の事件、世界にはいろいろの事が起ります。種々の動きや働きかけがありますそれらにびっくりしたり、乗せられたり、調子合せをしたり、お先棒かついだり反発したりで日を過さず、もっとしっかり信念を持って自主的に歩んで行くべきでないでしょか。

私達の小田原史談会も徒に大を求めず、地味にしっかり足元を固めて自主的な歩みを続けましょう。これが今年の年頭祈念であります。

（中野敬次郎氏執筆）

「後北条氏秘話」を会報掲載するに当り

香川政治（載録）

(二)山上宗二、北条氏に仕う

山上宗二という人は、天文十三年（一五四四）年に泉州堺の豪商で屋号薩摩屋に誕生した。

父は山上宗壁という人で茶の湯の数寄者の一人であり、宗二の茶道は父に啓発せられた後に千利休に就いて茶道を学ぶこと二十余年に及んだといわれ、その第一の弟子となって利休流茶道の奥伝を授けられた。そして瓢庵と号したのである

師の利休とともに織田信長の茶頭として仕えたが、信長歿後は、やはり師匠とならんで豊臣秀吉に仕えてその茶頭となっていた。

彼は非常な研究家で、蘊蓄の深さ、見分の広さ、そしてその卓越した茶道の識見は、師利休の多数の門弟中の追従を許さぬところであったというが、容貌が醜く、「顔にくてい」であったと伝えられ、その上、性格が剛直で信念が強く、誰彼の前でもしばしば毒舌を吐くので、遂には秀吉とも茶道の意見が合わず、その怒を買って二度までも浪人したという。そして最後に小田原に来て、北条家の客人になったのである。

宗二が秀吉に追われて大阪を去ったのは、秀吉に仕えた茶匠の一人津田宗久の「津田宗久茶湯日記」には天正十二年以後に宗二の名前が見えなくなるから、それ以前のことであろうと思われる。

宗二は大阪城を浪人してから、各地を流転し、一時北陸の金沢の前田利家のところに仕えたこともあるようだが、結局最後は小田原の北条家に落着いたのである。

当時、秀吉の天下統一の事業が急速に進んでいるときで、秀吉から追われた身にはどこに行っても安住の地がなく、結局、小田原の北条氏が関東支配の独立王国で秀吉の政権下に入っていなかったから、ここを永住の地と定めたものと思われる。

宗二が小田原に来住した年は明らかでないが、彼の遺書として知られている、「茶器名物集」の彼自筆の奥書に「天正十六年戊子二月二十日」とあって、茶道の門人桑山修理大夫は桃山時代の武人で、名は重晴といって、秀吉およびその弟秀長に仕え、但馬国竹田一万石、後に紀伊国和歌山四万石を領した人で、宗二がその奥書の中に「今度行脚の節、この一巻を貴殿に進上する」という意味のことを記しているので、これらの事情からして、天正十六（一五八八）年の早春に小田原へ下向したものであろうと言われている。そうすると山上宗二の小田原に住んだのは、天正十六（一五八八）年の春から天正十八（一五九〇）年春の死歿のときまで、満二ヶ年ということになる。

この間に小田原地方に茶道が非常に流行した。そのことが「小田原記」に「五十三年この方、宗二と申す数寄者、小田原へ下りて、茶の湯殊の外はやり、御屋形を始め諸人これを弄ぶ、此の頃、早川、荻窪、久野の辺に茶屋あり、御一門衆年寄衆、異風の茶の湯とて或は巡礼になり、俵を荷い或は行人やこむ僧になり、茶屋に入ること日々なり。加様の慰、不吉の瑞相なりと、心ある人申しけるが、果して三四年の内に哀れなる躰になり行きけり」

と記されている。同記に「宗二」とあるのは、言うまでもなく山上宗二のことで、このような小田原における茶道の急速な大流行を来たしたのは、恐らく宗二が小田原を自分の最後の地と決意して、精魂を傾けて彼の卓越した技術をもって指導に当ったがためであると思うが、それと同時に彼

の周辺には異状なまでに熱心な保護者や協力者がいたことで、その筆頭が言うまでもなく、北条四代の当主北条氏政であったにちがいない。この当時は氏政の反秀吉意識の絶頂期であるので、秀吉から追われてきた茶匠の亡命者とあれば、進んで彼を受け入れて客分として好遇保護したのであるそれ故小田原記にあるように「御屋形（北条氏政）御一門衆、年寄衆（家老衆）」まで北条一家が挙げて茶道を学ぶという風であった。

またこの時、宗二と北条幻庵が接触のあったことも当然考えられる。

幻庵は北条時代の一世の文化の指導者として知られる人であるが、彼が茶道にも優れていたことは、「小田原記」の中に

「天然細工に天骨を得て伝処の鞍の寸法、悉く習い極め給う。是のみに限らず弓の細工を伝へ給い、矢をはぎ、弦をさし給うこと世に無双、又石台を作り、茶臼を作り給うこと勝れたり。」

とあることによっても知られる。また幻庵は晩年に小田原城外の久野に住んで人呼んで久野幻庵と呼ばれたが、その屋敷には立派な庭園と風流な茶室などがあって、雅趣絶佳であったといわれる。それは天文十四（一五五）年に有名な連歌師宗牧が、京都から来って北条氏康を訪ね、招かれて幻庵屋敷にも行き、馳走と茶を供せられたときのことを記した宗牧の「東国紀行」の中に見える。

「幻庵後園の山家見すべしとて竹の枯葉を踏み分けてしるべせられたり。安房上総の浦々窓うつ心地して鎌倉山は茶屋の木末にかかれり。近き眺望は言うにたらざるべし」云々。

小田原に茶道が行われるようになったのは、勿論宗二が小田原にやってきたからではない。北条氏は代々京畿文化の導入摂取につとめたことでは知られた家柄であり、その中に立って幻庵などが永いあいだ指導の中心になっていたのであるそれが宗二が来ってから速かに大流行するようになったのである。

宗二と北条幻庵との交流の記録は現存していないが若い頃上方で修行した人で茶人でもあるので、宗二の小田原入りの時分はすでに頽老の時であったが、著名な宗二の名前は知っており或は知ったる仲であったかとも思うが、或は宗二の小田原入りに一役かんでいたのかも知れない。然しそれはあくまでも推測の域を出ないことであるが、小田原に来てからは宗二は幻庵に近待し、ともに茶道の流行につくしたに違いない「小田原記」の宗二の東下以来茶道の盛んになったことを記している中に幻庵居住の周辺の久野や荻窪の地に茶室が多く設けられたことを述べているのは、この辺の事情を裏書するような記事である。ただ、宗二が小田原に来ったという天正十六年は、実際には幻庵は非常な老齢で、翌天正十七年十一月一日には九十七歳で歿するのであるから、野上弥生子氏の力作、「秀吉と利休」に述べられている程の幻庵が宗二の絶体的の支持者でなく、同書には、天正十八年（一五九〇）秀吉と宗二が石垣山一夜城で会見したとき、秀吉がもう一度茶頭として仕えるよう要求したが、宗二が、幻庵との約束によって、小田原城に帰ると強言するので、秀吉が怒って宗二を斬殺した話になっている。しかし、これは小説ゆえ、どこまでも作者のフイクションで、現に、この年の前年に幻庵は歿していて、もうこの世にはいなかったのである。

小田原における宗二への傾倒者、支持者として最も大きな存在は、北条氏の重臣板部岡融成こと江雪斎であった。

板部岡江雪は有名な人物だが、元来、北条氏の家臣田中越中守泰行の長男で、板部岡氏を称し、後に岡氏をも名乗ったので、板部岡江雪とも岡江雪とも言う。非常な才人で、北条氏政、氏直に仕えて諸方面で活躍し、秀吉と北条家の決裂前に、北条側の使者として上洛して平和解結のために奔走したこともあって、秀吉家康に近待してその才能を認められていた。北条氏滅亡直後は氏直夫人督姫（家康の娘）の守り役をつとめ後に秀吉に請われて、その御伽衆にもなったが、和歌を好くし、書を好くし、茶道にも堪能な人物であった。茶道は小田原で宗二に学んで秘伝を授り印可状を与えられている。恐らく彼は京都大阪にしばしば上って秀吉に伺候し、和談もしているので、宗二を早くから知っていたらしい。宗二の小田原亡命については、宗二が江雪に頼みを入れたか、江雪の方から宗二に呼び水をかけたかとにかく江雪が一役も二役も買ったものであったことは、宗二小田原亡命後の江雪との関係からも容易に推測のできることである。

前掲のごとく、宗二の小田原入りは天正十六年二月以降であることに普通なっているが、天正十二年以前に大阪追放になった宗二がこの間の四、五年間もどこを流転していたのか、その足どりは不明である。天正十六年とするのは、桑山重晴に与えた「茶器名物集」の奥書に宗二在判にて書いた年が天正十六年二月になっており、その奥書の文中に「今度御行脚の節云々」とか「遠へ罷り下り候条」とかの文句があるところから言われるのである。一方「小田原記」宗二小田原下向の文には、「五三年此の方、宗二と申す数寄者小田原に下りて」とあり「五三年此の方」とは数年以前の意味で、宗二が「茶器名物集」を与えた人物は桑田重晴のみでなく数人あることを考えると、必ずしも桑田本の「天正十六年」にこだわる必要はなく、宗二はもっと早く小田原に入っているのではないかとも考えられるのだ。

㈢秀吉山上宗二を殺す

豊臣秀吉が茶道の名匠山上宗二を斬刑に処した悲劇は、天正十八年（一五九〇）四月十一日に起った。

何はさて、先づこの悲劇の起こった場所はどこであるかということであるが、石垣山一夜城であるとする説が一般だが、四月十一日ではまだ一夜城の築造が完成していないから、秀吉が石垣山に移る以前に本営としていた箱根湯本の早雲寺か、その周辺であったろうとも説かれている。

石垣山一夜城の築城について「北条五代記」、「関侍伝記」などには四月一日（天正十八年）と書き「鎌倉九代後記」には四月三日「太閤記」には四日、「創業記考異」には五日、「家忠日記」には八日の事としており、「大三川誌」には九日であるとしている。

諸書まちまちであるが、四月早々から開始されたものであるが、秀吉自身は天正十八年三月二十九日、親衛軍五万を率いて未明に沼津城を発して箱根山に進撃し、即日、北条方の山中城を陥入れ、四月四日は箱根宿に営し、次いで五日に湯本に至って早雲寺に宿してその附近に本陣を置いている。

秀吉自身が石垣山に移ったのは、「鍋島文書」によると、四月七日に秀吉より鍋島直茂に宛てた書翰には「相運寺に御座を居せられ候」と記しているが、「家忠日記追加」によると「天正十八年四月九日、秀吉大神君を笠掛山の陣営に招請して云々」と記しているの

で、四月八日、九日頃になったかと推測されるので、秀吉の宗二刺殺の悲劇のおきた四月十一日は、秀吉はすでに石垣山本営に在陣していたと思われる。

しかし一夜城の屋形や茶室などの大方はいまだ完成しておらず、秀吉は石垣山と早雲寺とを往来していたと思われるので、事件の場所は残念ながらはっきりはつかめない。

豊臣軍は四月四日に陸上部隊十一万余、水軍一万六千余をもって小田原城と小田原城下町を包囲する第一次攻囲線を完結した。同夜第一回総攻撃を、七日に第二回総攻撃を行ったが、城兵の反撃が強くて効果がなかったので、九日韮山攻撃囲の中から二万五千を割いて増援隊として小田原に招致し、第二次小田原攻囲線を作っている。

このような厳重は包囲線の中から、山上宗二が如何様にして小田原城を出て、秀吉の本陣に出向したかも謎の問題だが明らかでなくとにかく秀吉と数年ぶりの面接を行うことになった。

千利休は、小田原陣には最初から秀吉に同行して、その身辺に随従していたのであるが、宗二は彼の数多き門弟中の最初の門人であり、また最高の弟子であった。二十余年に亘って教えを受けて、利休茶道の奥伝を極め秘伝書を授けられた人物で、永年ともに織田信長、豊臣秀吉に茶頭として仕えた中で、利休わび茶の最も理解者であり、理論家であったのだから、不幸にも秀吉の怒りを買って追放されたが、どこでどんな流転の生活をしていることか袂を分かって既に消息を絶つこと数年音信もなかったのである。

宗二が小田原の北条氏に客分として仕えているという風評が都あたりでも薄々立っていた。南宗寺のある坊さんが鎌倉に信行に行っての帰り道、三島の竜沢寺という有名な臨済宗の道場寺で修業中に同寺で茶会が催されて、その会に山上宗二という名高い茶匠が小田原から出席したのを見たという消息などが伝えられたりして、利休が折にふれ心にかけていた愛弟子が小田原に在住することが明らかになったのである。利休は今回の小田原行に際して、この機会をとらえて秀吉にとりなして、宗二を謁見させ、再び秀吉の茶頭として仕えるようにしてやりたいという念願を深く心にひめてきたのであった。

宗二も早くから師匠利休の東下を知って、会いたさに、戦争勃発前にひそかに小田原城下を出て、箱根辺に隠れ住んでいたとも言われるし、また、小田原入生田風祭辺の富士山には利休の弟子として知られる攻囲軍の部将細川忠興（三楽）が陣を張っているので、利休が三楽と相計って三楽の同門の兄である宗二の救出に力をつくさせたが、三楽が豊臣方に内応の志ある小田原軍の松田憲秀と通じて宗二脱出に成功したのであるとも伝えられている。その真実は不明であるが、とにかく師匠利休の仲介によって、宗二は秀吉の本営に参上して久方振りの対面をしたのである。

両人互に少時久闊の物語の末、秀吉が宗二に向って

「宗二久し振りに貴公の茶が呑みたい。一服立ててくれるか」

と言った、宗二がかしこまって立てた茶を秀吉が一口ふくんだと思うと、急に気色が変わって

「宗二こんな日向水のような茶が呑めるか、貴公は相変らず余をおとしめに見ているか」秀吉の顔が見る見る真赤になった。宗二が冷かに答えた。

「太閤様、以前私めが申し上げたことをお忘れでございますか。それは戦争の茶でございます。太閤様は北条家御征伐という、ここは戦陣でございます故、戦陣の茶はぬるきを最とする礼に従ったのでございます」

「貴様！」

秀吉は怒りに震える手から茶椀を宗二に向って投げつけた。そして狂えるように太刀を取って立ち上がって宗二を刺した。

その場の茶室に居合わせた利休も茫然自失して、ほどこす術もない瞬時の出来事であった。

宗二はかくして非業の最後をとげたのである。四十七歳であった。

そして、それから三ヶ月にして小田原城も陥ちて北条家も滅亡した。

ここに「長闇堂記」という書物がある。この書物の内容については種々説のあるところであるが、茶人長闇堂こと、久保権大夫利世号を長闇子が、茶事や茶人に関する逸話を記したもので、茶道文献中の貴重な地位を占めている書物であるが、この書中に宗二が秀吉から耳鼻をそがれて誅された話を書いている。

かの山の上宗二はさつまや（薩摩屋）とも云し。堺にての上手にて、物をもしり、人におさるる事なき人なり。いかにしてもつら（顔）くせ悪く、目あらき者にて、人のにくしみ者なり。小田原御陣の時、秀吉公にさへ御耳にあたる事申して、その罪に耳鼻そがせ給いし」

大閤様ともあるべき人がこんな惨酷なしうちはしなかったのではないかと思うが、この有名な記事を否定する資料はない。

この事件のあった翌年の二月に宗二の師匠利休も秀吉から死を賜わって自害したのである。

(一)茶湯者としての宗二の位置

戦国乱世時代に箱根山麓の地で、不運の生涯を散らせた茶道の名匠山上宗二については、前回において極めて大まかな伝記を述べてたが今回は彼の諸雑について今少し掘り下げた検討を行うことにしたい。

第一に彼の生涯の年齢については、その誕生の年を天文十三年（一五四）泉州堺に生まれ、没年は天正十八年（一五八〇）相模小田原で非業の最後を遂げたとするのが普通で、四十七才であったとされている。

宗二は埋葬の地が不明で従ってどこにも墓石がないので確認が得られないが、宗二自身が著書の中に年齢について述べているところが唯一つある。それは、宗二が天正十六年戊子二月二十七日の日付で門弟桑山修理大夫宛に伝授した「茶器名物集」（山上宗二記）で

「此ノ大壺（深山という茶壺のこと）トモ拙子年四十三才ノ内ニ悉ク見果テ候」

と宗二自身がのべた記事がある。

彼が自分の年を四十三才と云っているのは、この書物を伝授した天正十六年（一五八）より何年以前のことであるか明らかでないが一、二年以前のことだと思われるので、さすれば天正十六年には宗二の年齢は四十四才か四十五才であったのだろうという推測が可能である。

たまたま、宗二が天正十七年巳丑二月板部岡江雪斎に伝授した「山上宗二記」の伝本の一つに

「道守君平書・本紙所々ノ附紙散乱ス因テ之ヲ粘ル。曽孫正会」

と記して、本文の諸所九ケ所にある張り紙をまとめたものの一紙に、「〇弐本（別本の意）に山上宗二今年四十五ト在リ。其本ハ年号天正十六戊子ナリ。然レバ此本は天正十七年ニ書ク本、コノ年ハ四十六才也。

○宗二四十五。天正十六戊子ノ年ト在ル、本ノ宛所ハ伊勢屋道七ト在リ」

と書かれ、また別紙の一つにも

「○山上宗二ノ年、天正十六戊子四十五ナリ。宛所伊勢屋道七ト之レ在ル書物ニ在ル也」

とも記してあって、この記事によって宗二の齢を知ることができる。

これで宗二は天正十六年（一五八八）に四十五才であることが明かでこれより逆算して、誕生は天文十三年（一五四四）になるし、更に宗二の死亡した天正十八年（一五九〇）は四十七才となる訳である。

宗二は秘伝書一巻、後世に言われる「山上宗二記」を、天正十六年に門人桑山修理大夫に授け、その巻尾に

「右一巻、今度御行脚之節、子ニテ候道七ニ書キ遺シ候」

と記していて、子息の道七にも桑山修理大夫に先立って同書の一本を与えていることを言っているが、その道七伝授の本は現在見出されていない。しかしその書に宗二自らが天正十六年（一五八八）戊子年四十五と記しているというから、天正十八年（一五九〇）死亡のとき四十七才というのは誤りがないであろう。

忌日についても天正十八年四月十一日説と二月二十七日説との両説ある。だが宗二が「山上宗二記」を最後に与えたのは、小田原城中で皆川山城守へであるがその巻末の奥書には

天正十八年庚寅三月日　瓢庵宗二

皆川山城守殿

と明記しているから、彼は同年三月にはまだ生存しているのがわかるのであって、四月十一日説が正しいのである。

宗二が生まれた天文の頃は戦国乱世の最もはげしい時代であったが、彼が生まれた堺の町は非常に繁栄しており、しかも、治外法権的な存在の町で、一種の自由都市であった。

ここに対外貿易で巨富を築いた貿易商が多数いて、その中の問屋仲間を納屋衆といって、経済上にも政治上にも大きい力を持っていたが、この豪商納屋衆の間に茶の湯が大いに流行して優れた茶人が輩出していたのである。武野紹鷗、津田宗及、今井宗久など、いづれも立派な納屋衆であってその納屋衆の一人として、そして利久の門人として山上宗二が出現するのである

宗二が茶人として初めて姿をあらわすのは、永禄十一年（一五六八）で銭屋宗仲所持の釜を入手したので、その披露の茶会を催した時である。この年の彼の年齢は二十五才であって、錚々たる大茶匠の輩在地の中で、このような若さで茶会を開いているのを見ると、彼の家の薩摩屋が堺の納屋衆の中でも堂々たる豪商の一つであったことと、彼がまた若くからなかなかの才幹を発揮する活動家であったことが想像できるのである。

利休に就いてその門人になったのはいつであろうか二十七才の時であるといわれているが、そうするとこの茶会を催してから以後のことになる。

利休門下となる以前の茶道は堺衆の中の数寄者の一人であった父山上宗壁の開発によるものであったろうし、また当時の堺衆の商道と茶道の上で、今井宗久と双璧と言われた津田宗及の庇護を早くから受けていたようである。

織田信長に奉仕するようになったのも、宗二の方が利休よりも早いがこれも津田宗及の推挙によるものと言われる。

「天王寺屋会記」これは普通に「津田宗及茶湯日記」と言われているもので堺衆の一つ天王寺屋こと津田氏の宗達、宗及、宗風の三代にわたる自会、他会の詳細な大茶会記として有名な記録といえよう。その中の宗及のものは、永禄九年（一五六六）から天正十五年（一五八七）まで、約二十年間の自会と他会を記している。この中に宗二の名が所々にあらわれる。中に天正二年の有名な京都相国寺の茶会の記録が残されている。これは織田信長が天正三年（一五七五）三月二十四日に同寺で催した茶会で、この時堺の衆（納屋衆）を大勢招いて行われたが、その中に宗二の名が見え、それによって宗二の茶人としての位置を推定することができる。

同書から一部を抜すいしてその記事を掲げてみる。

御茶湯台子

一、風炉に藤なみ平釜

下間丹後所持

。水指桶　平合子

。かうじぐちの杓立

火ばしそえて

一、床　五種菓子絵

一、紹鷗茄子　四方盆

一、かってにたんす　犬山天目

数の台に

一、ほや香ろらふたおき

一、紅や宗陽の

こうらい茶盌

右此分へ　反閑茶堂にて

宗及一人一服被下候

一、御茶過候て宗久宗易及

両三人書院にて千鳥の香炉、ひしの盆、香合拝見せられ候

一、拙者参候はぬ前に宗易宗左両人ばかり御茶被下候、其他の衆は御茶湯を見たる斗にて候

御振舞は湯漬、次の間にて各へ被下たるよし

一、人数　宗陽、宗悦、宗久、宗左、宗二、隆仙、隆世、宗易、常琢

と記してある。

この記事に少要点を説明すると「先づ堺の納屋衆の紅屋宗陽から進上した高麗茶盌で、友閑が御茶道としてお手前で津田宗及が一服お茶を賜った。

宗及のお茶が済むと、今井宗久と千利休（宗易）と自分（津田宗及の三人が広間で、千鳥の香炉、菱の盆と香合の拝見があった。

宗及が到着する以前にすでに利休（宗易）と宗左（茜屋）の両人にお茶を賜っていたが、その他の衆はお茶湯は宗及達三人が賜っているのを拝見したばかりで、お茶は賜っていない。彼等一同には次の間で、湯漬（御茶漬）の饗応があった

当日の招かれた人々は宗陽（紅屋）宗悦、宗久（今井）宗左（茜屋）宗二（薩摩屋）隆仙、隆世、宗易（千利休）常琢の人々であった」というのである。

この記事を見ると、当時の茶人の代表者が招かれた訳であるが、山上宗二が当時三十才の若さで、多数の老大家（利休五十歳）に互して名を連ねているのであって、宗二の茶人としての位置を知ることができる。

この茶席の次第を見ると茶器拝見とお茶を賜っている宗及、宗久、宗易の三人とお茶湯を拝見するのみで別室でお茶漬のみ頂戴した他の衆とには、明らかに待遇が違うようで、茶匠の位置を示しているが、この頃から右の三人を三大茶人として特別扱いをするようになったのである。「天王寺屋会記」によると、この後宗二は天正九年（一五八一）正月には津田宗及に従って近江坂本城、すなわち明智光秀の居城に至って茶を点じたりしている。しかし翌天正十年明智光秀の謀叛によって信長が殺され、次いで豊臣秀吉が光秀を倒して信長の跡を継ぐという急激な政治上の変化があったので明智光秀に親しかった津田宗及は一時苦境に立ち、宗久に従った宗二にも多少の影響があったようである。だがよく立ち直り、同十年九月に古渓宗陣が催した信長百日忌法要には、今度は利休に従ってこの会に出て、博多屋宗寿とともにこの会の旦那となっているのであ

る。秀吉が大阪城に拠って大いに茶会を催すようになると、宗二は師の利休とともに秀吉のいる大阪城に召されて、茶頭として参仕するようになった。

宗二の著書「茶器名物集」（山上宗二記）の中に、彼自らが、秀吉に召されて大阪に留め置かれている堺衆の茶人として

宗易（千利休）宗久（今井）宗友（津田）宗二（薩摩屋）宗甫（重）宗無（住吉屋）宗安（百舌鳥屋）紹安（田中）

の八名を記している。

㈡宗二の小田原流転

天正十二年（一五八四）以後彼の名は「津田宗及茶湯日記」を初めとして茶会記から姿を消してしまっている恐らくこの年、秀吉の怒りにふれて、大阪を追放され一旦浪人しているのであろう。しかし、その翌天正十三年正月に宗二は再び姿を中央茶会にあらわすのである。それは秀吉が有馬温泉に湯治に出かけ、これに従った三大茶人が各々茶会を催すが、宗二がこれらの茶会に参加しているのである

だが、それは秀吉に出仕したのではなく、加賀の前田利家に従って茶会に参加しているのであるから、秀吉から許されて大阪城の茶頭に帰ったのではない。多分天正十二年の浪人時は加賀の前田家に行ったものらしく、恐らくは前田利家の秀吉へのとりなしで、茶会参加が黙認されたもので、秀吉の心が解けるに至たらなかったに違いない。

宗二と前田家との関係は太閤秀吉から追放になったものを、豊臣家に最も忠実な一人である前田利家が召しかかえたり、客分にする筈がなく、恐らくは一旦大阪城を追放したものの、秀吉は彼の身を案じて前田家に預ける形をとったものであるらしく。そうでなければ、前田家に属する形で、太閤茶会に宗二が再び姿を現わすことができるものではない。秀吉の宗二に対する温情がそのあたりに動いているように思われる。

しかし、一度離れた太閤と宗二の心は、再びもとの通りにはもどりようもなく宗二の二度目の浪々となったようである。

加賀の前田家を去って、小田原の北条家に来るまでの、数年間の宗二の足どりはよく解らないが、中央の資料によると大阪に滞在していたように見え、その間に今井宗久の依頼をうけて宗久の菩提寺、堺の興臨院の復興に力をつくしていることが知られている。一方では地方（小田原）の資料によると、第二回浪々以前に小田原に来って茶道の興隆に当っているふしもある恐らく数年大阪と小田原を往来していたのではないか

とにかく、天正十七年二月に宗二が、小田原北条氏の臣、板部岡江雪に伝授した秘伝書（山上宗二記）の巻尾に

「穿人中以御芳志当府ニ堪恋仕之条、二十余年稽古之程、大砥申シ度シ候」

と書いているが、その意は、「私の浪人中に貴殿の御芳志を受けたので、当府小田原に居住することに決定した故、私が二十余年間稽古をして来た秘伝は全部貴殿に伝授したのである」というもので、小田原来住の以前に、江雪斉が宗二のために種々骨を折っていることがわかり、その結果、江雪斉など小田原側の勧誘によって、遂に小田原に落ち着くようになったことがわかる。江雪斉は宗二が秀吉から破門を受ける前後に度々上洛していて、秀吉と昵懇であり信用もされているので、或は秀吉から江雪斉へ、宗二の身の振り方を依頼したのではなかろうかそうでなければ、当時太閤と北条氏との微妙な関係のときに、特に江雪が大阪、小田原間の融和に力をつくしているときに、宗二に対して芳情を寄する意味が解せないのである。

さもあれ、宗二も第一回浪人以来、覆水盆にかえらず、大阪在住居も周囲の種々の情報が不興に落ち入り遂に上方を去って東下する決意をするに至ったものであろう。

東下を決心したのは天正十六年（一五八八）の早春であった。

宗二は東下に際して、我が子道七と、門人桑山修理大夫とに秘伝書（茶器名物集）を授けているが、その桑山修理大夫に与えた書の巻末に

「右一巻、今度御行脚の節、子ニテ候道七ニ書遺シ候。道七其方ヘモ進上致ス可クノ由申シ候ノ条、贈リ奉リ候」

と書いている。今度行脚することになったので、子息の道七のところ秘伝書を一巻書いて与えて来たが、道七が貴殿にも進上してくれと申すので、この一巻をお贈りしますと云っているのである。また巻尾の別条の項に

「一巻他見被サレ間敷ク候。第一者名物ノ判モ候、亦者密伝モ多ク候。傍以テ御無用ニ候、道七ヲ預ケ置キ遠クヘ罷リ下候条。何ヲ哉ト存ジ、一世ニ仕ヘズ候ト雖モ調進候。若シ死去仕リ候ハバ形身計リニ候」

とも書いている。行脚と言い、遠くへ罷り下ると言っているのは、言うまでもなく小田原を指しているので、宗二がいよいよ小田原永住を決心したことがわかる。文中特に子息の道七を預けて置いて行くことを述べているから、恐らく家族を大阪に残して単身小田原に下ったもので、この奥書を熟読すると言々悲壮で彼の心境まことに哀れを催すのである。

また、小田原で天正十七年の二月に江雪斉に与えた秘伝書の方の奥書の末文には

「此ノ一札、拙子上洛仕候カ、死去仕リ候後ニ熱心中ノ御弟子ニ御伝ヘ在ルベキ者也、以テ印可ノ状如件」と結んでいる。

両書ともに私が死んだ後には形見にせよとか、燃心の弟子に伝えよとか言って死去のことを述べているのは、近いうちに自分の不慮の死のあることを予想していたものであるらしい。

然しまた「拙上洛仕リ候カ」とも言っていて、再び許されて大阪に帰る日、そして家族と再会する日なども、はかない希望を持っていたらしい。同情に堪えない次第である。

然し彼には喜びの日は遂に来なかったのである。江雪斉に秘伝書を与えた天正十七年の春には、江雪がその後間もなく京坂に上洛して、秀吉と北条氏との融和について計ったけれども成功せず、翌天正十八年三月太閤秀吉の小田原攻めの大軍が東下して来たのである

宗二は遂に死期到来を観念したらしく、小田原攻めの大軍が箱根山の西麓に迫った頃、小田原城守備軍の一将で、宗二の門人であった皆川山城守に秘伝書の最後のものを与えている。

そして同年四月十一日に秀吉の誅に遇ったのであった。

かようにして、宗二の秘伝書として有名な「山上宗二記」（茶器名物集）は大阪伝と小田原伝とがあり、大阪伝は天正十六年初頭に先づ子息道七に与えられ、同じく二月桑山修理大夫に贈られ、小田原伝は天正十七年二月に板部岡江雪に与え、最後に天正十八年三月に皆川山城守へ、小田原城中で授けられている。

以上四伝があるが茶湯伝書の最もすぐれたものの一つで、利休茶湯の研究書として知られている。

扇町風土記

―風景から見た扇町の歴史―

星野　幸一

先日、少年の頃を井細田で過し五十年振りに帰郷したH氏が井細田がすっかり変ってしまったと云っていた。彼の頭の中には戦前の井細田があり、変ってしまった風景の中から過去の現存がまざまざと読みとれたのである。僅か半世紀の出来事であるが、この変貌が私たちに郷土史の興味や意義を伝へてくれたのであるはるかに遠い時代から足柄平野の中央を「まりこ河」が流れていた。流域一帯は原始未開の草原であった。古代の井細田の住人はどんな風景の中で生きて、どのような文化や生活を創り出してきたのだろうか。…と云っても、石器時代や縄文土器時代となるとどんな所が生活の場になっていたのか想像もつかない幻想のような話である。

先人たちは「まりこ河」とのかかわりを持ちながら生活の中にその流れや水を利用し、時には洪水に見舞われ、その危険から逃れるために幾度かこの草原を移動して適地を探し様々な生活を積み重ねてきたことだろう。

「まりこ河」が酒匂川となったのは何時の頃か時代は定かでない。文献によると応永三年（一三九六年）というから足利義満が京都北山の一角に金閣寺を創建した当時は「まりこ河」と呼ばれていたようである。

郷土の歴史といっても江戸時代は余りにも知られていない。そこで地方史の中から風景を視点にして扇町の江戸時代を掘り起してみようと思うのである。

小田原地方ではマグネチュード7以上の地震が十回も起きる等天災地変も多く富士山東南側中腹に出来た宝永山の噴火は、足柄平野の農に大きな被害を与える要因を作ったのである。

宝永四年（一七〇八年）に起ったこの大爆発では農村は壊滅的な打撃を受け、須走では三米の火山灰が積り全村が壊滅し、足柄上郡より小田原藩代官への報告によると噴火は十六日間も続いて田畑は焼石で六十糎近くも埋ってしまったという。

今酒匂川の堤防に立って富士山を眺め、猛煙を吐く桜島火山を頭に描きながら爆発の様子や噴煙はどの位の高さまで噴き上げたのだろうと想像してみると、地殻の変動の恐ろしさを感ぜずにはいられない。

山々の斜面に積った灰はその後の大雨で泥流となって谷間に集まり酒匂川へと流れ込んだ。駿東郡の村々では田畑を埋めつくした降灰の処置に困って一部は川に捨てたため、酒匂川は川底が浅くなって長い間の氾濫の原因となったという。大雨ともなれば足柄平野一帯の村々を呑み込んで海へ流れていった。

酒匂川の治水は長年に亘って全村流出というような水害に悩まされてきた農村にとっては悲願とも云うべき事業であったに違いない酒匂川の大規模な築堤と用水路が出来て、草原やデルタ地帯が見事な水田に変ぼうして耕地が飛躍的に拡大されたのは二宮尊徳翁が登場した時代のことである。現代の治水工事から考えれば万里の長城を築く思いであったろう。

天保三年（一八三二年）浮世絵師の安藤広重は東海道五十三次のスケッチ行脚の旅に出た。小田原の版画は航空写真程の正確さはないとしても当時の風景を物語る唯一のものではなかろうか

酒匂川の渡河風景は輦台に乗って渡る人、或は人足の肩車で、又は徒渡りと三様に描かれている。当時東海道では六郷、馬入、富士天竜は渡し舟。酒匂、興津安倍、大井川は歩いて渡らなければならなかった。橋をかけなかった理由については戦時の敵の利用防止や犯人の逃走防止、水深が浅く出水ごとに川瀬の位置が変るためとか、架橋技術の未熟等が挙げられている。何れにしても大雨で増水して一定の水位になると川止めとなるので両岸の宿は旅人であふれ、川明きまでの滞在費や旅程が狂ったので旅人たちはさぞかし困ったことだろう。

田園風景から想像される井細田は昔七軒百姓であったという伝承が裏付けられ人々の服装や、ちょんまげ姿も時代考証の一助になるだろう。

井細田との関連はないが酒匂川の氾濫と足柄梨とは無縁ではない。江戸時代の末期、度重なる水田の流出に困窮した桑原村の先覚者たちは富士川の氾濫に悩まされてきた流域農村が水害対策としての梨栽培に成功していることに着目して視察に出かけたのである。田は流れても果樹園ならば実が穫れるということで導入したのが足柄梨の始まりである。今日の立派な梨になるまでには農家の人々の並々ならぬ努力と改良がなされてきたことを忘れてはならないだろう。

総じて江戸時代の井細田がどんな風景で農民の暮し振りがどうであったかということは少なからず酒匂川氾濫の影響を受けてきたことだろう。私は台風の季節に酒匂川の堤防が決壊したことを子供心に覚えている田圃一面は湖面のようで何日も水が引かなかったのである。肥料も農薬も農業機械も持たない原始的営農の中で毎年のように水害に痛みつけられ、治水という難事業にも取組んできたのである。そこには専業農家の没落が起り、田畑の売買による移動で不在地主（六七％が他村の所有者）の増加となり農業外収入で生活を補充する農民の姿も見られるようになってきたのである。

このことは二川村（井細田、多古、今井）の村政の舞台にも作用して様々な矛盾を吹き出してきたことだろう。斯くして封建の時代は終焉に近づいていったのである。

井細田の村は明治期に入ってから専業農家より半農半商へと転換を始めていた井細田から多古にかけては仲買人としての米屋が多かった。足柄平野一帯の生産地と小田原消費地との中継点の役割を果していたのだろう。小田原の米相場は井細田で決ったという程の盛況であった。当時の米の輸送は専ら人力による大八車が活躍をした時代である。

大正時代の初期に入ると水田であったところに小田原紡績工場が出来たので商店や貸家、貸間を経営する人も増え村全体が活況を呈してきた。井細田にとって正に大正は小田紡の時代であるというような一時期を迎えたのである。工場誘致の条件として用地の提供者は相当額の小田紡の株主となったのである。赤煉瓦造りの工場も大正の大地震では倒壊してしまった。三万坪に及ぶ廃墟は十五年の長い間小田紡跡として放置され雑草は伸び放題となっていた。この野原は子供たちの自由な遊び場となり、昆虫採集をしたり、時には戦争ごっこも行われ少年戦士たちは敵情偵察から突撃までを一通りやってのけたものである。工場の西北角にあった稲荷様附近は夜半子供たちの肝だめしの恰好の場所になる程の寂しいとこ

ろとなってしまった。そんな訳で地元の株主は大損をして村の発展も停滞してしまった。

構内にあった大きなポプラ並木附近から眺めた夕映えの明神岳は美しく素晴らしい風景であったことを覚えている。

当時、往還（甲州街道）を小田原～塚原間の幌馬車が走っていた。座席にはクッションも無く乗心地に快適ではなかったがのんびりとした情緒があった。舗装されていない街道にはあちこちと馬糞が落ちていたものである。道路の凹みを補修する工夫の人たちを見かけたのもこの頃のことである。

私たちの少年時代、井細田は現在の旧道から酒匂川までは水田であった。人家の後に廻れば酒匂川の堤防が見えた。旧道の道巾半分は川であり盥舟を浮べて川を下るのも子供たちの遊びの一つであった。川の向いへは各戸毎に橋が架けられていた。石橋もあったが土橋もあり今井堰を曲ったところには番車の小屋があってひねもす水車が廻っていた。傍を通ると米を搗く音が小屋の中から聞え水車からの水しぶきが飛び散る様は農村ならではの風物であったが電化、機械化が進むにつれて水車も不要のものとなってしまった。水車小屋は電化されて精米小屋に変り現在では田圃の無くなった井細田の数少い農家が僅かばかりの飯米を精白しているに過ぎない。

街道沿いの川ではうなぎやなまずが獲れたし、場所によってはシジミやカワニナも獲れたものである。淀みの深い所では鮒やワカサギが群れをなして游いでいた。旧道はその川を埋めて拡幅されたため多古の消防署前から湯浅電池や富士フィルムの方へと迂回して新川が作られた。

土用に入って水田の干しが始まると堰の水量が減るので良く魚とりに出かけたものである。堰は手前から今井堰、中堰、土手根堰の順で北から南へ縦断して居り約百三十年に渉って灌漑の役目を果してきた。現在では湯浅電池小田原工場の構内となっている。魚とりの獲物は鯉、鮒、うなぎ、なまず、どじょう、目高等であったが別名を「あかはら」と呼ぶ井守も時折仲間入りをしてくることがあった。

真夏の昼下りジンジンする暑い中を経木の帽子をかぶって青田の堰え出ると、水澄しが忙しげに水面に弧を描いていたり、アメンボが水上を滑走したりしてそこには自然の姿があったものである。この頃ではついぞそんな情景も見られなくなってしまった。ことによると農薬や工場廃液等の流入による水質汚染の影響を受けて彼等の生存が脅かされてきたのかも知れない。

小田紡の跡地は昭和十三年（一九三八年）六月富士フィルムが買収して小田原工場を建設、近代産業の花形として躍進を続けている。

昭和十六年（一九四一年）七月には水田地帯に湯浅電池小田原工場が建設されたので三本の堰は工場の構内となってしまった。

土手根堰は多古の小田原製紙工場の排水路として利用されていたため川底には白茶色のヘドロがヌラヌラと貼りついていた。その工場も最近取壊しが始まって居り住宅団地に変ぼうするという。

村の近代化が進むにつれて井細田のローカルであった一面もだんだんと薄らいでいった。郷土の歴史を偲び多少とも歴史の匂いのするところは八幡神社の森、地蔵堂、道祖神と恵比須様の祠ぐらいのものだろう。これ等の営造物は郷土の遺産であり住民の「ふるさとの意識」を培ってきたことと思う。

昭和四十六年（一九七一年）七月には新道として国道二百五十五号線が開通した。建設工事では近代的な土木機械であるブルドーザーやパワーシャベル、ダンプカー等が縦横に活躍した。歩道橋も出来て信号機も至るところに取り付けられラッシュアワーともなれば車が洪水のように流れてゆく。扇町の町から水田の姿は消えてレストランが出来たり六、七階建てのマンションや病院等も建ち始めてきた建物が高層化されてくるとテレビ、ラジオの電波障害や風圧等の環境公害が起り生活の便利さと並行して騒音や大気汚染等という公害にも悩まされるようになってきた。

昭和四十六年十月には集落を形成以来住民に馴染まれてきたと思う井細田の町名が住居表示の変更によって扇町と改められた。

昭和四十八年（一九七三年）四月には飯泉橋の下流に取水堰というものが完成した。これは酒匂川の水を堰き止めてパイプラインにより京浜地区へ生活用水を供給するためのもので、酒匂川の上流には貯水と発電の目的で丹沢湖が誕生した。水資源のために湖底に沈んだ村の人々は充分な補償を得て故郷を去ったという。

昭和五十一年（一九七六年）七月には荻窪に小田原市役所の新庁舎が落成した。足柄村役場は足柄町役場となり更に小田原市役所足柄支所となったのでその都度標札が書き替えられてきた。足柄の発展と共に歩んできた木造総二階造りの建物は取り壊しの運命となり業務は本庁に統合吸収されたのである。長い間役場と呼んで親しまれてきた建物には明治、大正の風格が偲ばれたものである。跡地（約七百平方米）は児童公園となってツツジ等が植えられ、砂場や水呑み場のほか滑り台等の遊具もある子供広場に変ぼうしたのである。

歴史のバイオリズムは時代ごとに新たな風景を作り消滅と創造を繰り返してきた。井細田の戦前と戦後を書いてきたが戦時中から戦後の二十年間が空白となってしまった。

昭和十五年十二月、私は徴兵により現役兵として従軍することになった。八幡神社の社頭に於て日本の必勝を信じ村人たちの万歳を受けたのである。神社から井細田の大通りを青年団のブラスバンドを先頭に勇壮な軍歌と歓呼の声に送られながら小田原駅まで行進をした。甲府聯隊に入隊、一週間程で軍装品が支給され兵の心構えについて教育を受け、東京芝浦港から真黒な貨物船に乗船して日本を後にしたのである。

終戦までの六年間は中国大陸の戦場で過してきた。復員は米軍のLST型輸送船に乗せられ青島港を出帆佐世保港に上陸した。左に朝鮮半島の禿山を見ながら黄海を南下したのだが、朝鮮海峡を過ぎて五島列島に差しかかった時、出漁中の小さな漁船の人たちが日の丸を振って私たちの復員を迎えてくれたのである。

早春の五島の島々は青々として私たちの眼前に迫り朝鮮の禿山とは余りにも対照的であった。帰心は矢の如く、全員が甲板へ出て貪るようにして祖国の山河を眼にしたのである。切々として望郷の念禁じ難く互に見合せる顔からは涙が流れていた。復員列車が広島や名古屋も通過した。小田原駅からは大雄山電車で井細田駅へ帰還したのである。八幡神社の傍を通って家路を急いだ。

私たちの二十代は第二次世界大戦に終始したが滅私奉公の実を尽してきたのである。

戦時中の井細田について色々と話を聞いてはみたが実感が湧いてこない。米軍のB29爆撃機による空襲

は爆弾、焼夷弾の投下で熾烈を極めたとう。

復員直後の井細は未だ復興への息吹きが感じられなかった。内地は想像以上の戦禍を受けて居り、戦後の二十年は戦災復興から経済の高度成長期に入ってきたが、風景から見た井細田は大きな変ぼうはなかったようである。

歴史の風化が進む中で、若い人たちには想像も出来ない過去を透視しながら扇町の歴史を回想してみたが歴史の底に埋もれているものはまだ沢山ある訳で、地下の地層のどこかには未知の遺跡が眠っているかも知れない。

今のところ扇町が開発されてきた過程に於いて、石器や土器類の出土品があったという話は聞いていない

H氏は少年時代の自分の風景を大切に持っていたのだが、私たちは土地っ子として半世紀の変ぼうの姿を眺めてきたのである。

現在の史料が何百年か過ぎた後、郷土史の一頁としてその姿を現はすことに些かの意義とロマンを感ずるものである。　(了)

昭和五十五年八月

星野幸一

伊勢原の城趾 (一)

柏木次郎
協力　郷土史勉強家
山添隆二

伊勢原は大山の山岳信仰地で古くから近在近郷はもちろんのこと遠く江戸から信仰者が集まって来る。明治になってから後も、今や観光地としての人出が多く土曜日の午後や日曜日の午前中などは伊勢原駅前（大山山鳥居側）バスを待っている人の列は長く、又歩いて行く人もかなりいます。こうした町が伊勢原なのかも。伊勢原は大半が丘陵地で然も特産物はぶどう（巨峰、ネオマスカット、デラウェイ等）桃、栗などさらに量産的に見ると甘藷栽培水田など他の地区と比しても特産物少なく量産的産物も少ない様です、伊勢原を中心に南側は住宅地が大半を、北側は水田、甘藷、果樹地が多くして工業団地などで伊勢原は成り立っている現状です。

○糟屋館、上杉館、栗久保館、愛甲城、石田城、岡崎城、丸山城、城所城、栗原館、善波館、串橋館、平間城等、以上の城又は館等は平安末期から戦国期に至る時代の物で特に神奈川県下で有数な城の一つに岡崎城がある。単に岡崎城と言えば三河の岡崎城を連想して三河の岡崎城の方が余りにも有名な物になっている。然し県下有数の一つの城として岡崎城を掲げなければなるまい。

当岡崎城は伊勢原の八幡台々北から南下したもう一つの台地（先端）に位置し眼下は平塚方面広々とした水田がある、相模灘が一望出来る。西域は箱根山系、丹沢山系も一望する。岡崎城を中心として真田城、矢崎城、城所城、各館類で成立つが各時代を過ている。

岡崎城史跡案内板（伊勢原教育委員会）を掲げて見よう。

史蹟　岡崎城趾

相模岡崎城は藤原時代の末「平安末期」、天養年間「二四四年～二四五年」三浦大介義明の末弟岡崎四郎義実（二〇〇歳）によって築かれた典型的な平山城で、軍備と統治とを兼ねた名城として知られた。岡崎義実は源頼朝に仕え鎌倉幕府創立の功臣で、嫡子与一義忠を岡崎城の西方真田城においた真田与一義忠は、治承四年（一八〇）石橋山合戦で討死その勇名を遺し岡崎義実もまた悪四郎とよばれる豪勇の将であった。築城以来三浦一族の領するところであったが明応三年（一四九四）三浦義同（導寸）は義父の三浦時高を亡して子息義意を三浦の新井城へおき、自からは相模岡崎の城を取り立てて工を加え居城とした。周囲に西海地土腐（さいかちどぶ）をはじめとする湿地をめぐらし、南は断崖で岡崎の城と申すは、昔し頼朝の御時、三浦大介義明の弟岡崎悪四郎義実が住みし城とぞ聞えし、三浦一門数年住みせし処、要害きびしく支度せり（小田原記）とあるように天下の要害であった。

永正九年八月（一五一二）伊勢新九郎長氏（北条早雲）は伊豆、相模両国の兵をあつめて岡崎の城に猛攻を加えて遂にこれを攻め落した三浦義同は弟道香の拠る逗子小坪の住吉城にのがれ更に三浦はこの新井城にこもり一族とともに亡んだ。その後は北条氏の持ち城となったと思われるが廃された年代は詳らかでない。

岡崎城は標高三十五メートル、面積約一ヘクタール無量寺の境内が本丸で西方に二の丸、その西北隅に出丸があり取手口はそのあたりにあった。本丸の東方搦手口で城の裏口にあたる、三方には一重若しくは二重に空壕をめぐらし、南方は五～六メートルの断崖をなしている、城の東方には馬場をへだてて野陣台とよばれる台地があり城兵打って出る時陣立てをした所であろう本丸跡には古井戸がありその水面の辺りから城の南方紫雲寺のあたりに抜け穴が通じていたと語り伝えられている。本丸の西方入山瀬（いりやませ）の山中には岡崎四郎義実とその子与一義忠の乳人（めのと）吾嬬（あづま）の墓と伝える墓殆がある、宝筐印塔と数基の五輪塔が遺されており、吾嬬の献身的な篤志を賞して礼葬した場所へ後に義実を葬ったと伝えている

伊勢原市教育委員会案内板文中に出て来る紫雲寺は矢崎城として著名である。此文中は平塚在住の郷土史勉強家山添隆二氏手紙文中より掲げる。

紫雲寺は岡崎字矢崎と呼ばれています。一説によりますと岡崎郷の境界を決める目標に「矢」を立てた、先端という意味とも伝えられます。荘園時代は糟屋の庄のちに岡崎義実の領する岡崎郷に含まれました。下って後北条時代足軽衆の給地となり矢崎村として分れました。更に江戸時代に入りますと最初は夫領でしたが元禄十年以降は旗本、森、小林、曹谷らの各氏に分給されています。

それはさておき「矢崎」の知名度の高くなったのは何と云っても上杉禅秀の乱後、小早川氏が小田原城（華嶺の城）を大森頼明にうばわれてからではないでしょうか、頼明は小田原本城（小嶺の城）の修理改良はもとより、その配下となった現平塚市内の須田城（現天徳寺）（金目）土屋城（現土屋大乗院）平塚城（現中里八雲神社）そして矢崎城（現岡崎紫雲寺）に頼春の四男氏頼をその城主にしたとあります。

現在の岡崎城は本丸を無量寺で、周囲は畑や雑木林になっており大半が草深い城跡である。

四～九月の間にかけての伊勢原方面の野外調査は特にマムシに注意して下さい此辺ではマムシが多いとのこと、地元の農家の人達の話です。

一九八〇年九月七日

伊勢原市岡崎六四三
大谷荘一－五
柏木　次郎